

IT時代の行方とネットワーク社会



川浦康至氏
(横浜市立大学
国際文化学部教授)

橋爪大三郎氏
(東京工業大学大学院教授)

広瀬洋子氏
(メディア教育開発センター
助 教 授)

財団 今日では当財団の主催いたしますシンポジウムにご参加いただきまして、まことにありがとうございます。

このシンポジウムは政府の情報化月間の協賛行事として催しております。本日は、各界で活躍されている先生方をお迎えしております。最後までどうぞごゆっくりお聞きいただきたいと思っております。

広瀬 皆さん、こんにちは。広瀬洋子です。今日は「IT時代の行方とネットワーク社会」についてシンポジウムをさせていただきます。

とくに今日は、メディア技術そのものに焦点をあてるのではなく、メディア技術による大きな社会変化、二十一世紀に向けて、国境の問題、国家の問題、経済的なうねり、そういったものがITと連動してどのようになっていくのか、それが一つのテーマです。

もう一つはITが個人のレベルでのコミュニケーションをどのように変えていくか、そこに焦点をあてます。今日は橋爪大三郎先生と川浦康至先生をお招きいたしました。

自己紹介が遅れましたが私は、メディア教育開発センターという文部省の大学利用機関で全国の高等教育機関に向けたIT支援、また放送大学の講師として番組づくりなどにも関わっておりますので、大学から見たITのことについてお話できればと思っております。それでは橋爪先生よろしくお願いたします。

2001-9

おまけ

景月

日

衆

議

2001年(平成13年)7月26日

木曜日

ジンダウー 敗北を抱きしめて

第二次大戦後の日本人

● 世間で「敗北を」なにし、「敗北」を経験した本人が「敗北を抱きしめて」自分を変えていく姿を、共感をこめて描く。(実人語/朝日新聞7/1)

● 戦後史の根源的な問いに明晰な解答を与えてくれる優れた史書である。(池澤夏樹評/毎日新聞7/1)

● 戦後を、生身の人間が織りなした濃密な歴史のページとして、眼前に再現してみせてくれる。(橋爪大三郎評/日本経済新聞6/24)

三浦陽一
高杉忠明訳
田代泰子

ヒュリッツァー賞受賞作

【大反響増刷出来】

● ともすれば情緒と憶断に傾斜しがちな風潮に反省を強いる意味でも、味読す入る、価値ある一冊。(匿名批評/時事通信配信)

● 本書を読んだ人は、まるでハルザックの小説を読み終えた後のように、ここで登場する占領期のアメリカ人や日本人の素描を、何度も思い出すことになるだろう。(藤原一輝/中央公論8月号)

● 近年にない日本現代史の傑作である。(加藤彰評/エコノミスト7/1)

● 様ざまな可能性を含んだ、錯綜した占領期日本の現実を、ありありと読者の前に再現した。(石田雄評/季刊書評2001)

● これだけ生き生きと書かれた日本占領史は他にないと思えます。(東京都府中市・牛山敬二)

● 過ぎ去ったこの時代の動きが実に丹精に描き出されている感銘をあらたにした大作。(新潟県新潟市・川爪英二)



岩波書店

四六判・平均476頁
本体各2200円

すべてのコンピュータが ネットワークで結ばれる

橋爪 私は社会学という学問をやっています。ITやコンピュータの専門家ではありませんけれども、社会に関係するテーマですので、今日はそういう外野の観点からお話ししたいと思います。

まず、ここ数年、ITという言葉がよく言われるようになりました。これは二つの要素から成っていると思います。

一つは当然のことながら、コンピュータです。コンピュータが約半世紀前に発明されてから、ほとんど機能が高度になり、そして安価になって普及した。その数が爆発的に増えていることが、背景にあります。

もう一つはそれがネットワークの中でつながって、一人一台の時代になり、コンピュータ単体ではなくシステムとして、地球全体を覆うようになった。コンピュータがネットワークを組んでいるという点が、新しい点です。

このネットワークが普及して、一人ひとりこのネットワークが普及して、一人ひとりのところに届いて、企業も学校も日常生活も、このコンピュータとネットワークなしには動かない、理解できない。これが新しい社会の標準装備、社会のインフラストラクチャーになるところが、IT社会の意味だろうと思

うわけなんですけれど、その先のところ、という周辺のことを少し考えていきたいと思っています。

コンピュータは一体何をしているのか。これまで簡単なことですが、中は論理的な機構でできていて、そして演算(つまり計算)をしているわけですね。なぜ演算をコンピュータにさせるかというと、極めて速く、複雑なこと、人間ではとてもできないような計算を、機械的に瞬時にしてくれるというところに特長があるわけですね。最初はコンピュータは高かったんですけども、こういう計算をどうしてもしなければならぬ領域、たとえばミサイルの軌道計算とか国民所得の計算、そういう大規模な事業に使っていました。価格がどんどん下がって来るにしたがって、もともと日常的なデータ処理の業務に、これを使うようになりまして。

日常的にわれわれがやっているデータ処理は何か。もともとは基本的なデータ処理は、言語処理です。私たちは言語をしゃべって、社会のコミュニケーションの基本は言語でできています。そこでコンピュータが、言語処理に関与してくる。ここが新しい段階だと思

います。七〇年代末から八〇年頃にかけてワープロができて、八〇年以降、とくに九〇年になってからはこういうかたちで発展しているわけです。

しかしコンピュータは、言語処理をしているように見えますが、まだ本当の意味では言語を処理していないと思います。

たとえばワープロのことを考えてみましょう。ワープロのキーボードで何か入力するといろいろ出てきますね。そして変換をしたり操作をしたりして文章を書いていきますが、機械自身は言語を書く能力がないのです。機械はサポートをしているだけで、実は生身の人間が言語を理解して、機械を操作している。つまり、人間だけが言語能力を持っている。機械はまだ言語能力を持っていない、こういう段階なのです。ですから本当の意味では言語の処理をしていない。単に言語データを処理して、人間を助けているだけなんです。

人間にとって望ましいのは質問をしたら答えてくれたり、英語をしゃべったら日本語にしてくれたり、あるいは人間と同じように何かデータを与えると、新しいアイデアをつくってくれたりというふうなものです。そういうかたちでの情報処理、言語処理をコンピュータができるようになれば、これは本質的な意味でつぎの段階に進むと思います。今は少しづつそういう方向に進んでいると思いますが、現状はまだそのかなり手前であると思

います。

では、ITのどこが新しいのか。言語処理の部分については、むしろネットワークの部分、そしてコンピュータの値段や普及度の部分だと理解できます。

このIT化が進んでいくと、二十一世紀の社会はどのようになっていくか、そのスケッチを描きたいと思います。

コンピュータが主に扱っているのは情報データです。情報やデータは蓄積できます。それからたいへん安価に複製できます。ですから今まで図書館や書類として蓄積されていたものを電子テキストにして、複製して普及させるということがたいへん安くなります。情報が安価に生産できることになりました。情報ばかりではありません。物質も生存のた

とて必要なのは、情報ばかりではありません。物質も生存のた

橋爪大三郎氏



英語に対する言語戦略を 明確にしよう

それからもう一つ、特に日本にとって、どういうインパクトが及ぶかということをお話ししたいと思います。

IT革命が進んでいくと、それと並行して起こってくるのは、英語の支配という問題です。英語の支配とは、言葉を変えていうと、日本語の孤立という問題です。日本語を使っているのは一億人余りで、英語を使っているのは十億人余り、そして英語がますます共通語になっていくという趨勢を考えると、それに数倍する人数になる、地球大の情報蓄積は、基本的に英語で行なわれる。ですから

のほうは大いに普及していくわけです。

結局、二十一世紀は、物質的には目に見えて進歩しないのに、たとえば、世界の情報、世の中にはこんな不平等があるとか、第三世界の人々から見ると先進国はこんなに進んでいる、このギャップはちつとも埋まらないとか、そんな現状が手に取るように分かるようになる。それがネットワーク社会の帰結でしょう。そうするとどうなるかというと、世界中が隣の芝生状態になる。第三世界に大きなフラッシュが生まれてくるのではないかと、これが、社会的に見て一つの帰結です。

英語にアクセスできなかったり、英語で情報を提供できなかったりする社会は、大きな不利益を被ることになるわけですね。

当面、日本の中で、コンピュータのデータの基本的なかたちである英語、これにアクセスできる人を増やす。英語の情報量を増やす。あるいは、英語との接続のいい日本語の情報をつくっていく。こういう努力をしないと、いくら工業製品でよいものをつくったり、いくら日本国内の生活環境を改善したりしても、国際社会の中で相対的な地位は低下していくかざるを得ないと思います。

そこでIT社会に関しては明確な情報戦略、言語戦略を持って、日本社会の発展の方向を集中的にそちらに向けていく必要があるというふうに、私は思っています。

そして、短期的・中期的には、英語の抜本的な教育改革が必要です。英語を外国語と考えるのはこの際やめて、日本語と並ぶ言葉、第二公用語というふうに考えていかなければならないんです。これを三十年ぐらいのうちにやりとげる。

ITにより社会の仕組みの変化が起きる

それから中・長期的には、コンピュータのあと日本社会へのインパクトをもう一つだけあげます。

IT革命が起ると、人間関係が変化します。意思決定の方式も変化します。とくに英語圏では如実に起こっていると思うんですけども、きちんと整理したデータをみんなに公開し、説明できるかたちで意思決定を行なう。そういう組織が正しい組織で、そういう組織でなければ生き残れないのです。

最近、日本の大企業や官庁でいろんなスキャンダルが起っていますが、要するに、そういうかたちできちんとデータを公開でき、説明できるような意思決定をしていなかった

翻訳機能、日本語と英語を機械的に変換するソフトを何としても開発する。

そうすると日本語のハンデというのはなくなるので、日本は計りしれないメリットを得ることになるわけなんです。

この方面に集中的な資本投下を行なって、IT革命のうち通信ではなく、言語処理の能力の部分を高めていく、フロンティアとして重視していく姿勢を打ち出していっているのか。これが二番目に言えると、私は思っています。

のではないかと。

ここはたいへん重要な点で、こういうことを十分意識して社会関係をIT革命の時代にふさわしく整理していく。これは、コンピュータがいじれるとかそういう話でなくて、意思決定のメカニズムを変えていくという話なのです。

なんで日本人がこういうふう下手なのか。森総理がそうだし、半徑十メートル以内のことはよく分かって、そこで人間関係を調整するという技術でやってきた。しかしIT革命は、半徑十メートルより外側、地球の裏側までが問題になるということです。

個人本位のコミュニケーションが活発に

川浦 情報化時代のパーソナルコミュニケーションというテーマで、個人のコミュニケーション行動、日常生活のレベルでいくつかお話をしたいと思います。

まず新しいメディアの影響について。それからバーチャルという言葉。最後に便利ということの二面性をお話して、パーソナルコミュニケーションの問題を論じてみたいと思います。

細かい話になりますが、インターネットの中のコミュニケーションを、このようにまと

川浦 康至氏



めてみました。(図1)

一つは個人コミュニケーション。個人本位のコミュニケーションをシステムとして活発にしている。あるいはそういう可能性をもつということ。インターネットでは、パスワードが利用の上で欠かせないわけですが、パスワードは個人が管理するのが基本です。それも個人のコミュニケーションを促す可能性があります。

もう一つは広い意味のウェアラブルです。携帯電話とかパソコンの小型化に代表されるように、場所ではなく人間に代表されるようになった。その魅力が機器の制約を凌駕するということです。古くはポケベルがそうですけれども、せいぜい十六文字とか二十五文字しか送れなくても、それでもコミュニケーションなんです。それはコミュニケーションではないという方もいるかもしれませんが、「これから寝る」とか、「今お風呂に入ったところ」に始まり、従来コミュニケーションの組上り上がってこなかったようなことまで出てきています。つまりそれなりの魅力を個人単位のコミュニケーションが持っているということです。

ね。面識圏ではない、会ったこともない人が社会関係をもって意思決定ができるということが重大です。

そこでふり返ってみると、西欧社会はキリスト教社会です。キリスト教は、ローマ教会がそうだけれども、国際組織なんです。フランス語あり、英語、ドイツ語、ポーランド語、スペイン語あり。しかし彼らは、ラテン語とか共通語をつくって、言葉が分からないなりにコミュニケーションをとって、知らない人同士が一つの組織を運営してきた。イスラム圏もそうですが、そういう国際組織を運営してきたという伝統がある。そういうことができる人たちなんです。

ですからインターネットになっても、たとえばドイツの企業とアメリカの企業が合併するなんていうことがわりあいやりやすい。いっぽう日本人は、過去の歴史から、そういう日本と外国にまたがる国際組織をつくらなかった経験がほとんどない。ここに大きなネットワークがあります。

ここを克服していかないとインターネット時代の利点を十分に享受する、そういう社会的仕組みをつくるのは難しいのではないかとかなり危機感を持っておりま。広瀬 ありがとうございます。たいへん興味深いお話なのであとでもう少し突っ込んで質問してみたいと思います。それでは次に川浦先生お願いいたします。

それからもう一つは、中年男性や中間管理職の人たちのことです。最近のリストラでさまざまな悲哀を味わっているわけですが、そういう人たちがなかなか弱音を吐けない。個人本位のコミュニケーションがシステムとして、あるいは環境として用意されるようになると、ふだん着ている袴を脱いで話すことができる。女性の井戸端会議のようなことが男性でも可能になる。あるいはそういうことにあまり抵抗感を持たない人が増えてくる、そういう傾向があります。

もう一つは、コミュニケーションの閾値の低下です。つまりコミュニケーションをわざわざするまでに至らなかつたものがコミュニケーションに乗るようになってくる。そのことがマイナスに働くと、トラブルの原因にもなったりするわけです。要するに言わなくともいいことを言ってしまうというのがその典型例です。プラス面で考えると、一つはコミュニケーション欲求の顕在化です。つま

新しいコミュニケーション手段の特徴

- 個人コミュニケーション(パスワード、ウェアラブル)の台頭
- 機器の制約を凌駕
- 中年男性のコミュニケーションの活性化
- コミュニケーション閾値の低下
- コミュニケーション欲求の顕在化
- 「報告クン」(実況中継コミュニケーション)

図-1

ツール、手段の出現に伴う社会的変化

り、したいけれども何らかの事情で今までできなかった、その部分がコミュニケーションというかたちをなすわけです。

それからもう一つは「報告クン」。先週(十一月七日号)の『ブレイブイ』に出ていた言葉ですが、自分の今の状況を逐一報告する若いサラリーマンが増えているというのです。テレビカメラ付きの携帯が普及したら、まさにニュースキャスターのように自分の状況を報告することになるわけです。突き詰めれば同時進行の日記的なコミュニケーションが増えてくるような状況が出てくるのかな、と思います。ですからメッセージの一つひとつは短いけれども、頻繁になされる。しょっちゅうコミュニケーションしているというふうな状況が考えられるし、そういう兆しが見えるように思います。

つまり、携帯電話とか電子メール、あるいはホームページに代表されるメディアコミュニケーション、または、そういうハードウェア、あるいはインターネットを通じたコミュニケーションが支配的になってくると、個人がコミュニケーションの基本単位であるということを感じざるを得ない。それによってコミュニケーションがしやすくなる人もいれば、かえってしにくくなっていく人も出てくる。そういう意味で、最近デジタルデバイスという言葉がよく使われますけども、むしろ人々を分ける軸が変わっていることのほうが注目すべきではないかと思えます。

今までのお話はどちらかというとコミュニケーションの環境が変わって、コミュニケーション行動もこう変わりそうだ、あるいは変わりつつあるという話でしたが、それと同時に無視できないのが当然社会的な環境です。

ここではコミュニケーションの絞りを絞りましたが、人間関係の質が変わってきているということがあります。学生たちに友達の数は？と訊くと、人数がやたらと多いのです。四十人とか五十人といった数字が珍しくありません。

これはある意味では新しいコミュニケーションスキルが出てきている証なのかもしれません。私が考えるような従来型のコミュニケーションスキルが全体として低まっている。コンビニで観察していると、レジで精算するときに、携帯とかウォークマンを聞きながら言葉をいっさい交わさない。店員が「ありがとうございます」と言っても、何も言わないですと出ていく。そういう状況を日常的によく目にします。それは私からすればスキルの低下に見えるわけですが、もしかししたら新しいタイプのコミュニケーションスキルを持っているのかもしれない。

そういうようなこととメディア環境、主にコミュニケーション手段という意味ですけれども、その変化が、お互いに作用しあいがら、共鳴しながら変化しつつある、動きつつあるというふうな思っています。

友人関係の変化について。これは博報堂が毎年行なっている「生活定点」という調査の一部です。(図2)

連絡方法を人間関係に応じて使い分けるという人たちが出てきています。「電話のほうが気楽」というのが意外に少ない気もしますが、これだけいる、というように見ることができません。

この表で申し上げたいのは、若者だけでなく年齢の上の人たちでも友人関係は多いほうがいいと思っている。それで、友人関係を広げるとか多くの友人関係を維持するためにはやはりメディアというのは無視できないわけです。こういうふうな欲求と現在のメディア環境の変化というのはいくつか歩調が合っている。もちろん電話があるからとかメールがあるからということ、こういうことを言っている可能性もありますので、ニワトリとタマゴの関係のような気もしますが、結果として

はこういうふうになっていきます。

新しいコミュニケーション手段、メディアが出てきたときの変化をお話しておきたいと思えます。最初の段階、つまり外部からの闖入者としての段階です。今までのコミュニケーションのありようというか世界の中に新しいメディアが入ってくるわけです。

次の段階は新しいコミュニケーション手段を組み込んだかたちでコミュニケーションがなされる。そういう段階です。たとえば携帯電話。電車の中で観察していると、遅刻を詫げる電話がけっこう多いことに気がきます。

「今、電車の中なので、あと何分ぐらいで着く」とか、母親、サラリーマン、学生、みんな遅刻関係のことで使っています。

携帯電話が一般的でなかった頃には、できるだけ時間を厳守するようにし、途中で何かあってもいいように、少し早めに出る。どうしても間に合わないときだけ携帯を使う。そのうちに携帯が日常化してくると、携帯で

青年の交際観(博報堂調査, 1998)

	十代男	女	成人
友人は多いほどよい	70	65	57
人付き合いは面倒	21	26	23
年長者とは苦手	31	27	7
年少者とは苦手	30	22	17
電話の方が気楽	27	28	14
連絡方法を使い分ける	23	31	12

図-2

いつでも連絡がつくものだから、遅れるという罪悪感が薄まってくる。それから待ち合わせも従来であれば事前に時間と場所を決めて会っていたわけでは

携帯でいつでも連絡がとれるということになると、待ち合わせはいつでもできる。今日

道具の発達で思わぬ結果が

次は、道具の余波についてです。新しいコミュニケーション手段の位置づけが変わってくる様子が日頃観察されます。その変化の方向というのはいろいろあるんですね。

これは一つの例ですが、イギリスの『ランセット』という医学雑誌に載っていたものです。二、三年ほど前にイギリスでシートベルト着用が義務づけられた。決められてから二十三月月間に、それ以前と比べて事故の件数がどうなったか調べたのです。そうしたら、どのケースも事故が増えているのです。歩行者の死亡率が八%、自転車に乗っている人が一三%、自動車事故による死者は二五%それぞれ増えています。

これにはいろいろな解釈があるのですが、この論文を書いた人によればこういうことです。シートベルトを着けたから安全だと思っ

ちよつと時間ができたから、とか、近くまで来たので会いませんか、というかたちです。それを待ち合わせと違っていいのかわかたかりませんけれども、人付き合いも変わってくる。それが第一段階と第二段階の違いです。

をする人が増える。つまり本来であれば事故による死者が減ることを期待しての法律をつくったわけですが、かえって危険な運転をする人を増やしてしまったのです。

これはもともとと医学論文で、本来のテーマはコンドームの着用率の話です。コンドームをつけるのと妊娠する可能性が減るというので以前よりも性交する回数が増える。そういう文脈だったんです。

つまり道具の影響、あるいは新しい手段が持つ影響というのは潜在的な欲求を強める方向で働く可能性もあるというのです。つまり、コンドームを奨励すればするほど、性病がむしろ増えるという結果をもたらすということ

です。また東京ガスの調査も興味深い結果が出ています。風呂が手軽に沸かすことができるようになり、いつでも入れるようになった。い

つでも入れる、そういう状況になればなるほど、むしろ若い人たちのほうで風呂離れが増えてくる。簡単に入浴できるということがむ

しる風呂離れを促している。非常に象徴的な出来事だと思ひ、道具の効果という意味で紹介しました。

私語のIT化、潜行する私語

次は、私語のIT化、潜行する私語です。つまり、教室は静かだけれども私語をしているというわけです。

数年前になりますが、広い教室で離れて座りながら携帯電話で私語している学生のことを知人から聞かされたことがあります。そのときもだいぶ驚きました。おしゃべりをするために隣に座る必要がないのですから。ただそれはまだ話し言葉ですから、少しざわざわするわけですが、そのうちにメールが簡単にできるようなになると、メールを授業中に交わすようになり、甲南女子大の島田さんの調査によると、授業一コマあたり、七六%の人が一件以上メールを受け取っている。それから発信メール、授業中メールを出している人が二五%ぐらいいる。そして、そういうことに対して「かまわない」と思う人が約半数いる、そういう状況が今出てきています。これがなぜバーチャルとつながるのか。これは英語の辞書のバーチャルという言葉の意味と例文です。(図3)

要するに「大統領は形式上の支配者にすぎず、実質的には彼の配偶者が支配者だ」。そう

いうときにバーチャルという言葉が使われるのです。つまり実質的とか本質的がバーチャルのもともとの意味です。

バーチャルリアリティという言葉がよく使われます。その一例として、たとえば体感マシーン、ゲーム機を考えてみたいと思ひます。たとえばジェットコースターの体感マシーンに乗ると、あたかもジェットコースターに乗っているように感じ、あるいは実際のコースターよりもっとジェットコースター的かもしれませぬ。というふうな考えますと体感マシンのジェットコースターの本質とか実質だけを抜き出した固まりといえます。ですからバーチャルという、普通「仮想」と訳しがちですけれども、しかも仮想という言葉には「仮の」とか、「偽りの」という意味がニュアンスとして強いですけれども、むしろ反対で「エッセンス」という意味があるかと思ひます。そういうふうな考えるといろいろ面白いことが見えてきます。

情報化社会はしばしばバーチャル社会だと言われます。これまでの社会関係とか人間関係、あるいは社会のありようは実はコミュニ

さざるを得なくなってくるような状況が出てきているのです。

「フチ家出」という言葉があります。つまり携帯電話が出てきてどこにいても連絡がとれるとなれば、家に帰らなくてもいいわけです。あるいは家にいるかどうかも分かりませぬ。そうすると、ただでさえ、今、家庭の機能はアウトソーシングしていますので、家族の本質は何だろうということを意識的に問うていかないと、家族を維持するのは難しくなつてきているように思ひます。ですから「教室する意志」というか「授業する意志」、あるいは「家族する意志」を意図的に持つていないと、これからは維持するのが難しくなってくる。だから家族を営めるのはほんとに一部の、いわば「家族エリート」になつてしまうかもしれないというふうな気さえします。

広瀬 洋子氏



今申し上げたようにバーチャルがわれわれに突きつけるものはいろいろあるわけです。ITというと、われわれが持つひとつの実感としては、「世の中が便利になる、生活が便利になる」という言い方、あるいは感じ方があると思ひます。では、「便利」即ち「幸福」だろうかということ。心理学でもようやく幸福に関する本格的な研究が始まりつつあります。電子メールは確かに便利で、その便利さを享受している人も多いと思ひます。ですが、電子メールの読み書きに時間をとられて、毎日、二時間はすぐ経つてしまつて肝腎の仕事がなかなかできない。だげど気軽にコミュニケーションができる。ふだん会わなかつた人とも連絡が取れるし、中学のときの同級生から急にメールがくるとか、要するに今まで切れていた人間関係が復活する、そういうメリットもあります。

つまり単純に便利だからいいとは言えないですね。たとえば電子メールのやりとりは時間にとられるけれども、それが私にとっては

真に豊かな教育とは

広瀬 どうもありがとうございます。

橋爪先生の論点は日本はこれから二十一世紀に向かつてはつきりとしたIT戦略を打ち出さなくてはいけないということ。そのいちばん大きな柱がまず英語の支配をどのように

vir-tu-al /adj

almost what is stated; in fact though not officially: *The president was so much under the influence of his wife that she was the virtual ruler of the country.*

[Longman Dictionary of Contemporary English]

図-3

非常に大事であるとか、それは維持したい。友人関係を継続したいと思ひば電子メールは非常に付加が高いですね、使えば使うほど。でも、私は静かな生活が好きである。友人は二、三人でかまわない。となれば電子メールは使わない。そういう選択肢もあるわけですからそれは個人レベルから社会レベルまでさまざまなレベルで存在するのです。ですから世の中はこうだから、IT化だからインターネットだからということで、使う必要はないのです。携帯電話も意図的に切る人、つかまりたくないということを持たない人もいます。そういうかたちでとかく自分はどういう生き方をしたいのかということを考える。そうしないと流されてしまう。ですから便利即みんなが採用し、使うということにはならない。それでいいと思ひます。

最後に、自分の中で何を優先して何を後回しにするか、そういう判断をこれまで以上にしなければいけないことを強調してひとまず終わることにします。

乗り切るか、英語の教育の改革を含めて言語戦略をどうするかということが一点。もう一つは意思決定のメカニズムや、公的私的機関個人も含めて、データ、情報の公開ということがさらに重要になってくるとおっしゃいま

した。

川浦先生は個人のレベルのコミュニケーションがこれからは変わっていくということ。どのように変わっていくかは、プラス面もマイナス面もありますが一人ひとりが、強い意思を持ち、それは何が幸福で何を尊重していくのか、そのためには何を犠牲にするのかも含んだものです。二十一世紀は強い意思を持たなければいけないという提起でした。

お二人のお話は広がり角度は異なりますが、非常に大きな共通点がある。それは、われわれがただぼんやりと、いい思いができてそこそこ幸せにやっていたらいいと、安穩に幸福と思えた今までの世界から、かなり強固な意思、それには犠牲を恐れぬ心と努力、明確な価値判断を持たないと技術にのみ込まれていってしまう。そういったことがお二人の意見から共通の問題として浮かび上がったと思います。

それではここで、私は大学が、二十一世紀にどのように変わっていくのだろうかというお話をさせていただきます。

私は、文部省や郵政省の「ITなんか戦略」というようなお役所的なお話ではなく、ITを障害者の立場から研究して、また考えていきたいと思えます。

私ははじめ「IT教育なんて、誰が受けたと思うか」と思っていました。私はイギリスのオックスフォード大学の大学院で教育を受けました。一週間に一度、チュートリアル

とあって、教師と一時間、投げかけられた課題について本を読み書いてきたことを一対一で議論する授業です。紅茶をいただきながらにこのこと、「おまえは愚かだねえ、なんて浅薄な考えをするんだ」というのを、懇々と説明されるという、おそろしく貧乏で過酷な授業です。そういった経験から、ITなんていちばんお手軽でいちばん貧困人が受ける教育だと思っておりました。

しかし仕事柄、大学におけるITの世界的な潮流を見てまいりますと、やはり二十一世紀は、ITなくして教育は語れないと思うようになりまして。

現在、「大学冬の時代」というふうに言われています。十八歳人口が低減しているの、これから二、三年の間に短大や地方の女子大学は潰れるだろうと言われています。けれども、世界的に見ますと、教育需要はますます増大しています。そしてそれは十八歳以下の教育の需要ではないんですね。昔だったら何々大学の何学部を出れば、いい会社に勤めてずっとやっていかれた。でも、今はたとえば十年前に経済学を学んだ。二十年前にどこそこ大学の医学部で学んだといっても、もうほとんどその時点の知識は陳腐化しています。常にわれわれは学び続けなければならぬ。新しい情報を摂取しなければ世界についていけない。そういう社会の中では、継続教育、生涯教育がこれからの主流になっていきます。そのときに一対一のチュートリアルなんて悠

長なことはやっていられない。職場や家庭にいながらにして学べる遠隔教育、インターネットや衛星を使った教育がどうしても求められるようになります。つまりわれわれは一生勉強し、学習しなければならぬ社会に生きざるを得ない。そのときにITはやはり大きな武器となっていくだろう、ということ。今アメリカなどではバーチャルユニバーシティといって、大学に行かなくても、インターネット上の授業を受けて大学の卒業資格を得られるシステムが盛んに行なわれるようになってきました。たとえば日本にいてもスタンフォード大学の学位を取ることができまして、英国のオープンユニバーシティなどの遠隔高等教育は世界中に五百以上のブランチを持つています。

それでは、まずここで、放送大学が制作にたずさわり、主任講師を務めました「障害者と高等教育」という授業番組の一部をご覧いただきたいと思えます。

*
放送大学もいろいろの試みをしておりま

VTR 「障害者と高等教育」
(ナレーション)「金沢大学助教授、福島智さんは一九六二年兵庫県に生まれました。九歳で失明し、十八歳で聴覚を失いました。盲聾者として日本で初めて大学に入学し、東京都立大学大学院の修士、博士課程を経て、現在は大学の教員として特殊教育や福祉について教えておられます。」

「……ちっちゃな壺に入れられて深くて暗い海の底に沈められたようだった」と言います。点字は読めても日常的なコミュニケーションが消えてしまう。孤独と苛立ちの中、お母さまが何気なく点字タイプを真似て指を叩いたことから指点字で会話をするという方法を見つけました。それはまさに絶望の淵で出会った一筋の光明でした。それによって友人たちとの会話が回復し、学業を続けていくことが可能になったのです。

福島さんにとって指点字はそのときから現在まで暗闇と沈黙の世界を外界につながる重要なコミュニケーション手段になりました。大学の講義を受けるときは指点字通訳者、テキストは点訳と多くのボランティアによって支えられてきました。大学で働く現在も指点字通訳者ではなくてはならない存在です。

福島さんはパソコンを利用して研究者としても高いレベルの仕事なをなさっておられます。また全国盲聾者協会の理事としても精力的に活動していらっしゃいます。

福島「ほんとは障害がゆえに受けている不利

益とか差別とかっていうのは、障害そのものより、その不利益や差別に対して戦わざるを得ない状況におかれることです。これは無理矢理戦場に連れ出されるようなもので、あるいは無理矢理ボクシングのリングに上げさせられるようなものですね。ボクシングが嫌いな人もほんとはいるんです。だけど障害を持つてからなぜボクシングしなきゃいけないのかっていう理不尽さはあると思うんですね。だから私は障害を持つてる学生諸君、戦いなさいとは言えないんですよ。あるいは言いたくないんです。ほんとは君たちが戦わなければいけないこの状況自体が理不尽なんだ、おかしいんだということをまず社会にアピールしたいですよ。」

ナレーション「障害を持つがゆえに戦わざるを得ない理不尽さ……」

*

VTR
(ナレーション)「大胡田さんは司法試験のゼミに入っています。ゼミの教授は最初は全盲ということで、学習についてこられるかどうか心配していましたが、今ではすっかり周囲になじんでいるとおっしゃっておられました。」

大胡田「講義を受けるというところでは、黒板に先生が文字を書かれるときにできるだけ声に出しながら書いていた。書くことをお願いして、多くの先生はそうしてくださっています。あと授業中に配付するプリントな

んかも、一つ前の授業に早めにくださって、僕が朗読をする時間を稼いでくださったりとか、あとは僕は電子的な情報ですとパソコンをしゃべらせることで読むことができたので、フロッピーディスクに入れてくださったりとか、あとEメールで僕のパソコンまで送ってくださったりする先生もいます。ほんとに本が読めないということ、法律の勉強していく上で、もういかにともしがたいところなんです。『六法全書』なんていうのは絶対いつも引けなければいけないし、あとは法律の論文なんかもいつも読んでなければいけないところなので、それが読めないということ、ほんとに一つにしてワン・アンド・オールですね。」

(ナレーション)「大学側は大胡田さんのために図書館の一部屋に点字パソコンやテキストリーダー、点字の『六法全書』を用意しました。大胡田さんはその部屋で週に数時間、友人に……」

学生「彼本人がそういう、言ってしまうと体験者で実体験を常に行っている人なので、そういうところからの発言ですから、やっぱりその発言の内容にも重みを感じられるなと思います。」

これは放送大学で初めて字幕をつけた授業番組です。このあとには聴覚障害者の学生さんの学習風景なども載っています。(今日は時間がないのでそれは割愛させていただきます。)

誰にとつて意味のあるものなのか

広瀬 今ご覧いただいたように、橋爪先生もおっしゃいましたが、まず言語情報を処理できるといのがパソコンや、ITの大きな強みだと思います。

ここでいちばん助かるのは誰かというところ、読む、聞く、話す、書くに対してハンデを負っている、障害を持つる方たちです。これは単に障害者の問題というよりは高齢化社会の、二十一世紀におきましては、われわれ一人ひとりの問題です。

私は全国の障害を持つている学生さんたちにインタビュー調査とアンケート調査をいたしましたけれども、障害が重ければ重いほど、大学においてはITの能力が高いということが分かりました。

数年前になりますが調査のために、筑波大学の博士課程で学んでいる男子学生さんの、部屋にまで押しかけて行って生活ぶりも見せていただきました。彼はトイレに行くこともできない。食事もほとんど自分でできない方でした。はつきり言って、もし彼がコンピュータと出会わなかったら彼の考えを他人に伝えるのは至難の技でした。彼が小学校の時お父さんが、高いコンピュータを一台彼のた

めに買い与えました。そして彼はそこから自分を発信し、クリエイティブなものをそこで表現する能力を身につけました。もう卒業なさったかもしれませんが、筑波大の博

変わる大学、変わる職員像

また大学のほうの話に戻ります。IT時代を迎えて、これからは大学の教員も大きく変わらざるを得ない。今まで学生の知らないことを何でも知っており、それを伝授するというのが先生でしたけれども、これからはもう秘伝はない。すべての情報は公開されるようになり、インターネットの情報では、先生よりも学生のほうが先にいっているということが現実おきています。

先ほど言いましたように教員の役割は、知識の伝授ではなく、生涯教育や継続教育、遠隔教育を通じて、知識をいかに獲得し、いかに扱っていけばいいのか。インターネット上のガセネタと信頼性の高い情報を見分ける方法など、教えるというよりもインストラクターとしての役目がより重要になってくる

士課程で自分を助けるコンピュータを設計しておりました。彼とはトリーキングエイドという、機械を通じてしゃべったんですけれどもお話ししてみると素晴らしい素敵な青年で、ああ、この人だったらずつと何時間でも話してもいいわっていうほどの好青年でした。ですからこのようにコンピュータが今まで実現不可能だったコミュニケーションを素晴らしい発展させたことは大きな出来事です。

と思います。

まず大学運営が変わります。この大学運営は授業、教員、学生、それから組織、というふうに変わっていくと思えますけれども、たとえば事務手続き、休講の確認、課目の登録、こういったものももちろん変わっていきます。それからITを使うことによって教員は、ほんとにそんな教え方でいいの？そこでオーディオ教材を使ったりその資料を使うことは的確なの？ そういったことを逆に問われるような時代がくると思えます。

そして今言った教員に求められる能力としてはインストラクターとして、そして質の高い情報探査能力を持つ人として、そしてさまざまな情報を編集していく力、そういったものが求められていくと思えます。

皆が生涯学習しつづける時代に

最後に立ちほだかる、英語の壁、これがどのように日本の大学に影響を及ぼしていくか、これは大きな問題だと思います。つまり高校生でも大学の授業をインターネットによっての受講が可能になってゆきましょう。

そして社会人はまたリカレント教育、生涯教育、さらに知識をつけていく教育をITによって受けるでしょう。そして障害者や妊婦、高齢者、病院に入院している人たちさえもそうなります。イギリスの公開大学は一九七三年に開設されましたが、潜水艦に乗っている軍人なども、その遠隔教育のターゲットとして考えられてきました。学生たちは日本にいても、スタンフォード大学やUCCLAに行きたい、ということが実現する時代になっていくでしょう。

今、日本の大学はあまり気付いてないようですが、高等教育という市場は、二十一世紀に、世界中を巻き込むたいへん大きなビジネスチャンスのある国際市場になります。それもITによる遠隔教育によって拍車がかかります。

このビジネスチャンスをイギリスの例でみてみましょう。イギリスはEUの中の唯一の英語国です。そしてオックスフォード、ケンブリッジに代表される質の高い英国の高等教育

育の伝統。それから旧植民地を中心に英国の教育制度を真似たたくさん国々があります。マレーシア、香港、また中近東、またアフリカあたりもそうです。これは英国の学習関連ビジネスが大きな世界マーケットを持っているということです。

それから一九七三年にできました英国の公開大学、その三十年にわたるBBCと共同した教材、教授法のノウハウなどの経験と歴史があります。

ここで一つ注目したいのは英国のオープンユニバーシティの場合、障害者へのサービスというの一九七〇年の初めから行なわれました。エリート中心主義だった英国の高等教育に風穴をあけようとしたこの大学が、多様なニーズと、フレキシブルに対応しなければならぬ人たちにどうやって教育を届けようかということの本気になって考えたからにはかなりません。最初は目の不自由な方にはカセットテープで教科書を朗読したものを送りました。今はWeb上で音声変換して聞こえるようになっていきます。また聴覚障害者に対してはテレビの授業のシナリオを送りました。今はそれもWeb上でテキストが公開されるようになりました。

そうやって障害者を最初から外さずにサ-

ビスの中心に置いたことにより、どんな人たちにも対応できるシステムというものを三十年間で築いてきています。ですから、IT時代の遠隔教育をすすめるうえで、多様なニーズへの対応がおどろくほどスムーズに行なわれていきます。このへんが日本の放送大学などとは全然違うということです。

これ私のお話を終わらせていただきますが、実は今日は橋爪先生、川浦先生、それから私三人でどのへんで議論をまとめたらいのか、最初からどきどきしておりましたけれども、共通項としては、二十一世紀に私たちはどういった戦略を持ってやっていかななくてはいいの、何を尊重し、何を犠牲にし、何を優先していくかという強い意思を持たなくてはならないということではないでしょうか。

そして今、IT、ITと国内では騒がれておりますが、世界の潮流のITと、日本のIT、たとえば教育などでは考え方にかなりの差があるということです。国によってもずいぶんITに対する見方が違うということです。実はメディア教育開発センターで、全国の大学を相手にアンケート調査をしました。ほとんどの大学はITを使うと授業の効果があるとか、学生が面白がって見てくれるんじゃないか、それがITのいちばんの効果だという反応がありました。それはよく考えてみると、NHKの幼児番組が妙なコンピュータロボットを出してきて、「ハイッ、ツギハ・コ・レ・デ・ス」とかというのと同じです。

全然文脈と関係ないところでただ技術があるから使う、それで子どもたちはきつと喜ぶだろうと思っっている、実は子どもたちはそれほど喜んでないんですね。そういった程度で、まだまだ大学は認識していないようです。

「話をリンクさせて」

淘汰される組織、生き残る組織

橋爪 ITは進行中の技術で、まだ始まったばかりですから、私のような専門家でない人間があればこの先を予測するのはちょっとおこがましい面もあるのですが、お二人のお話を聞いて思ったことを述べたいと思います。自動車や飛行機が発明された当時のことです。自動車が発明されたときは馬車の連想で、馬をエンジンに置き換えたわけなので、本体がまず馬車のかたちをしていました。そして馬をなしにするところまではつきりしていたのですが、一体そのあとどういうものが自動車になるのか、そのイメージや形がなかったのです。そして自動車らしい自動車になるのに何十年かかかっています。飛行機の場合は鳥の代わりに空を飛ぶ、というイメージがありましたから、まず鳥の形で翼が動いたりいろいろあって、やっと現在の形になった。

今も同じではないかと思えます。私は社会学者ですから、組織を考えます。今までの組織

世界のナレッジエコノミー（知識経済）の中では実は教育に対するニーズは年々増大しています。なおかつ低コストで質の高い教育を、生涯にわたってアクセスさせようと考えています、そういった海外の大きな構想の下

は、ITなどないことを前提にできていくわけです。たとえば企業には、トップと中間管理職とラインがあつて、コミュニケーションはハンコを押ししたり書類を回したりして、何回も会議をやつてものごとを決めてきた。学校はいろんなメディアがないので、教室に学生を集めて一斉授業をやつてきた。これではよかつたんです、ITがなければ。

しかしITができる、これが最善だとい

ITを追いつく

川浦 私の話をもつぱらしんどさばかりが前面に出たような印象を与えたかもしれません。けれども、たぶん多くの人にとってはしんどいけれどもいい社会だと思います。そういう意味で楽ではないけれど、はるかに生きやすくなるかと考えています。

と思うでしょう。でも、しんどい半面、生きている実感が味わえるのではないのでしょうか。つまり個人本位のコミュニケーションをきっかけに、あるいはそれを外圧にして、社会の

「ハイ」の「言」をひたすら「ミニ」ゲーム

広瀬 ありがとうございます。

ちょっと川浦先生に質問したいのですが、実は私の夏カリフォルニアにある大学で夏過ごしてまいりました。

そこには英語研修と称しまして日本からもたくさん学生が来ていて、世界中の学生に混ざっていました。

その中でいちばん情けないと思つたのは日本の男子学生です。彼らは挨拶ができない。まったく知らない人たちとコミュニケーションをとつたときに「ハイ」って言うるか言えないか。英語はへたでもうまくて「ヤアー」「サンキュー」って言うるかどうかです。もうそのひとことで、今晚のピザパーティに誘ってもらえるか、会話のチャンスが得られるかが違ってくるのです。

でも先ほどの先生の発表にあつたように、ITスキルは上がつてるかもしれないけれども、従来型のコミュニケーション能力が低下しているのではないか。国際化したときに留学などでは、従来型の英語のスキルの前に、「ハイ」と言えるか、言えないかというの

に流れるIT観と、日本の大学のそれとはずいぶん違うのではないかと思えます。

それぞれの発表を受けて、橋爪先生のご感想を伺いたいと思います。三人の視点から、どのようなことをお感じになったでしょうか。

う保証はないです。たぶん最善じゃないですね。ではどこをどう変えたらいいのか。とりあえずこれまであつたものの代わりにITを入れてみましょう。しかし、変わるべきところがまだ全部変わっていないのです。これからもっと変わり始める。ですから、どこをどう変えたらいいのかというアイデアを早く考え、早くそれを活かして、最も効率的にあるべき姿を取り入れた、そういう組織が生き残り、そうでない組織は淘汰されていく。これが今後何十年かかかつて進んでいくことではないかと思えます。

広瀬 川浦先生、お願いいたします。

現在でも女性の地位の問題などがありますし、個人で自由に生きることが今以上にうまく進んでいけばいいと思います。もちろん今の状況のほうが利益が大きい人はいるわけで、そういう人たちにとってITは好ましくない、あるいはそれがもたらす影響は好ましくない

ありよとかか生活のありようが変わつてくれば、今よりも生きやすくなるのではないかなというふうな期待をしていますし、そういう追い風にしたいなあと思っています。

は命に関わってくる問題なんですね。そのへんはいかがでしょうか。

川浦 パーチャルということからさせて考えると、実は今でもあんまりコミュニケーションスキルは高くなかったのではないかと思つています。だけど言わざるを得なかつた。しかし自動販売機が出てきて、いちいち言葉をお互い交換するものが買えるわけですね。ですからかえつてそういう代行手段が出てきたために、今まで目に見えなかつたことが見えてきた。それが結局スキルの低さだと思つ

知の枠組みが変わらつつある

島田 島田でございます。私は、最近ちょっと歌舞伎に凝つておりました。「おーい、お茶のコーナーがあるんですね、市川新之助という役者の。私は、この新之助を見て、こんな素晴らしい役者はいないと思うようになり、そこから歌舞伎を見はじめたんです。歌舞伎は伝統芸能ですから、こういうITとはまったく関係の

んですね。

だから今までもけつして高くなかつた。それがただ明らかになつただけかなあというふうに思いますけどね。

広瀬 たしかにそうだと思います。それでのときのことですが、日本の男子学生は隅っこにいて、なんとか座りをしてたばこをプカプカ、プカプカやつてる。それでいて英語の文法のテストではけつこう点数はいいんですよ。でも何か意見を求めると何にも言えない。そういった状況の中で、先ほど英語を何とかしなくちゃいけないと申しましたが、話す内容さえもない、そのほうが問題じゃないかというふうに思います。

それでは、今日、この会場で宗教学者の島田裕巳先生がいらっしゃつております。島田さんは若い人たちの新宗教への動きや変化というのをずっと追われていらつしやいますので、今のお話を受けてご意見を伺いたいと思つ

ない世界なんです、ただ新之助のファンの人たちがホームページをつくつておまして、そのなかにはかなりすまじいというか、熱心なものがあるんですね。たとえば新之助が出た演目のデータがほぼ完璧にそろつていたり、新之助について扱った雑誌などについての情報も全部あります。そこにはニュースもあれば掲示

板もあって、そこにまた情報が集まってくる。

そういうホームページは世の中にたくさんありまして、大学の先生よりもそういう人たちのほうがはるかに知識があったりする。九州のある公務員の方がドストエフスキーのペーじをつくっておられて、その書き込みというのが、目茶苦茶長い。ドストエフスキーの小説は長いですけども、それに見合うくらい長い書き込みをファンの方々がしている。

結局それは、知の枠組みが大きく変わってきているんだと思います。知の発信が個人のレベルでかなり可能になってる。昔だったらそういう知識は大学とか図書館でないと、情報として集められなかった。今は、たとえば国立国会図書館にアクセスすると、蔵書目録を外から検索できたりする。それぞれの大学図書館にも、そういうのがありますから、文献目録をつくるのは非常に簡単になったわけです。昔だったら文献目録をつくるというのとはものすごく大変な作業で、素人には、一体どこを見たらいいのかが分からない。専門書を見て、その文献目録に載せられたその論文や本を見て、それでつくり上げていかなければならなかった。それが、今は自宅にいて、どんな人でもできるようになった。そうすると、大学とか知というものが変わらざるをえない、大きく変わってきてるんじゃないかと思えます。それに対してまだ大学が対処できてないのではないのでしょうか。

先生のレベルでもわりと身近にITを使え

ください。そういうことを言っているんですけどして全員に教えるのか。そうするとレポートの出し方や授業の運営が、それを前提にできるからです。システムとしての効用、集団としての能力のアップということを第一義に置いているんですね。個人用ではない。ここが非常に違うなと思いました。

それからコミュニケーション能力の点でも、ITをパーソナルなコミュニケーションスキルとして使っていると、それに依存するようになってしまふ。パーソナルなコミュニケーションスキルは、原則上、知ってる人に連絡するというツールなんです。ところが先ほどの広瀬先生のお話の「ハイイ」というのは、知らない人とどうやってコミュニケーションをくるかという話です。そこで、ITというものの本質を考えると、これは不特定の人に

ネット上でスキルを身につけることも可能か

川浦 一つはコミュニケーションスキル。低いほうばかりを強調しました。しかし今の橋爪先生のお話とも関係しますが、たとえば現実生活ではシャイで十分なコミュニケーションがとれないという人で、ネットワークの世界であればできる人がいる。深刻なシャイだとネットワーク上でも困難を感じるようすが、ある程度軽い人であればネットワーク上ではできる。そのさまざまなコミュニケーション

と思うんですね。さっきメールのお話がありましたけれども、僕が先生だったら学生のメールアドレスを全部把握しておいて、授業に來てない学生には授業中にメールを出して、それで来ていないから答えられないと成績を落とすとか。そういう意地悪な使い方というものもできるんじゃないかと思えます。そう考えると、先生としても対抗できて面白いか

パーソナルツールとして使うか、組織的に使うか

広瀬 ありがとうございます。今の島田さんのお話、橋爪先生いかがでしょうか。

橋爪 そうですね。大学が変わらなければならぬというのとはそのとおりなんですけれども、ちょっとその前の話に戻します。

川浦先生のお話とも関係があるんですけど、ITの捉え方が、日本とヨーロッパで少し違うなあと話なんです。川浦先生がいろいろご紹介くださったのは、IT化に伴って情報発信を個人ができるようになった。これはパーソナルなコミュニケーションツールなんだということですね。日本人が理解したのはこの文脈なのじゃないかと思えます。ポケベルにしても携帯電話にしてもメールにしても、全部個人対個人で、自分が言いたいことを友達か、友達みたいな人につなげていく、こういうことなんです。

安価に情報を伝えるメカニズムですから、特定の知らない人と新しく社会関係をつくり出していくときに最大の能力を発揮するはずなんです。ですから、日本人の今のITツールの使い方はここが逆転している。組織的に、そして新しい社会関係をつくるということが非常に弱いんじゃないかという印象を持ちました。大学の対応の遅れというのもそういうことで、学生一人ひとりとはむしろITになじんでいるけど、パーソナルなコミュニケーションツールとしてしか使っていない。大学がITの可能性を見出し、それに投資し、大学の機構改革をして、知のあり方を変えていく、というところはたいへんに遅れている。こういうふうな、反省材料として受け取りました。広瀬 ありがとうございます。川浦先生いかがでしょうか。

川浦 経験が、今度はリアルな場というか、顔を突き合わせたコミュニケーションで、自分らしきとか、伝えたいことを伝える力へ持っていくことができる。だからふだんの生活場面でコミュニケーションがうまくできないからということでもネットワークに逃避する人もいれば、ネットワーク上の経験や自信が核となってリアルな世界へつながっていく。そういう二つの方向があると思うのです。

など、ちょっとくだらない話ですけども。そういう意味でずいぶん知の枠組みが変わってきて、はたして大学とか、そういう制度が、今までのままでいいのか、ということが問われているんじゃないかと思えます。たとえば大学という組織をですね、何をいけば変えていかなければいけないのかということも、教えていただければと思います。

私は去年一年間ハーバードにいたんですが、そちらに行ってみて感じたのは、ITというのはべつなふうにつまみつかれている。ここでは、まあ遅れているせいもあるのかもしれないんですけど、あんまり誰も携帯電話なんか持ってないわけですね。持っている人もいるんですけども、けっこう大きくて重たいモトローラかなんかで、日本のようなああいうガジェットみたいなものではないんですね。その代わり一年生が大学の寮に入った途端に、人数分のデータジャックがある。入ったらコンピュータをそこへ接続しなさい、さっそく明日からレポートはどうやって書きなさい、図書館の本はこうやって検索しなさい、それを教わるんですね。ITは武器と考えられていて、大学に入ったらその武器を使って知的に活動して

広瀬 ほんとにつながつていきますか。私は、なんかそのへんは懐疑的なんですけど。ITで自分を表現することができた人が、今度自分の身体のようにその回路を逆流させて、「ハイイ」と言えるようになるのでしょうか。

川浦 厳密に言えばそういう人もいるとしか言えないですけども、それを支持する研究はいくつか出ています。要するに、ネットワークでは、何かを言わない限りコミュニケーションにならない。ただ黙って聞いているだけではネットワーク上では存在しないのと同じです。ですから何か言わざるを得ない。何か言ったときに反撃を受けるかもしれないし、賛辞を受けるかもしれない。けれども、そういうところでオン・ザ・ジョブ・トレーニング、要するに実際に体験しながら学ぶ。つまり今まで人とコミュニケーションを図りなさいとか、自分のことをきちんと言いなさいと言われても、へたな人はどうしたらいいかわからないのです。だけど、たとえば人の言うことはきちんと聞きなさいとか、人の話を聞くときは頷くようにとか、そういうふうなスキルレベルの話から入っていく。それをネットワーク上でのコミュニケーション、たとえばあまり文章を長くしないとか、あるいは言ってきたことに対してなにが答える場合は、必ず最初は「ありがとうございます」とお礼で始めるようにと示すことです。一見些細なことなのですが、そうした目に見えるかたちで、あるいは実行可能なかたちで示してい

けば、会ったときにもやがて「ハイ」と言えるように持っていかけるのではないかと思えます。ネットワークさえやっていけばいいとは思いませんけども、そういう試みも入れながらやっていけば実を結ぶと思います。

広瀬 そこで一点、また質問なんですけれども、ITの電子的なやりとりは匿名なんですか。「ハイ」と言った場合、敵は自分の目の前に迫ってくるわけです。でも匿名でコミュニケーションができるITは、どうやってそれを身体に戻していくことができるのでしょうか。匿名性の中にどんどん入り込んで過激になったり意地悪になったり、オタクキーになつたりということがチャットページなどでもよくあるんじゃないかと思うのですが、そのへんはいかがでしょうか。

メディアと現実とのバランスが重要

広瀬 それでは橋爪先生、いかがでしょうか。橋爪 ITが広まって新しいコミュニケーションのチャンネルが増えた。このこと自体はいいんですけど、もしその副作用みたいなことを考えると、従来あるコミュニケーションメディアとのバランスというか、棲み分けの問題だと思えます。

川浦 そのへんの分かれ目はどこにあるのか分かりませんが、匿名の作用は二つ方向があると思えます。一つは社会性が意識としても希薄になってきて、今まで抑えていた影の部分、たとえば中傷とか罵倒という方向に行くこともあると思えます。ですが、かたやふだんは立场上、地位上、言えないことが言えるという部分があります。つまり、本来の自分というか一人としての自分になれるという部分があります。ですから、匿名の意味というのはいくつかある。その分かれ目がどこにあるのかは、断定的に言うことはできませんけれども、少なくとも一つの方向に働くのではないということだけは確かです。現実でもたとえば社会的な意義を考えれば内部告発というのはいくつかある方向だと思います。

聞く。もし彼が小説を書いてなければつして話は聞かれなかつたらうなということ。ITの場合も似たようなところがあった、そこであるスキルを發揮したりなんかして、そういう人として認められるようになれば、実際のコミュニケーションにもはね返りはあると思えます。

〔質疑応答〕

—ITのよさ

大学の役割も教育のかたちも変わる

広瀬 それではまず橋爪先生への質問です。ITによって知の編集は教育に効果を發揮すると言われているけれども、本当に人間や、学生の思考力がアップするのでしょうか。そのへんをお伺いしたい、ということですか。いかがでしょうか。

橋爪 ITは今の段階では、データベースというかたちだと思います。情報がたくさんあるという事です。昔のようにデータベースをわざわざ構築しなくても、ホームページとかいろいろなサイトがありますので、それを検索するというかたちでネットワーク全体がデータベースのかたちになるわけです。検索していくときには、今のやり方ですと、情報の価値については判断しません。それは検索する側が条件を絞り込まなければならず、機械のほうは条件に合うものを、全部出してきてしまうわけです。

ではたくさんある情報をどこで絞り込んでいくか。これは機械はできないので、人間がします。もしかして、どこかにそういうことをしてくれる人がいるとすると、それをまた

データベース化して、そこにアクセスしてその情報を使う。こういうことですね。情報が増えれば増えるだけ、その情報を絞り込むということが難しくなるわけですから、これは今のところ人間がやるしかない。では誰がやればいいのか。ある人間がやって、そのやり方がいい加減である、べつな人間がやってそのやり方がしっかりしている。それぞれについてのまた評価というのがありまして、それがまたデータベース化される。こういういたちごっこですね。

そうすると大学の役割は何かというと、最も信頼するに足る選別の基準、価値観、見識、原理原則、こういうものを体現している人間がいる。それは競争的な状況で勝ち残ってそこにいるというのではないとまずいわけなんですけども、そういう信頼できる機関の一つとして生き残っていくのではないのでしょうか。

そして、学生は片方でデータベースによる膨大な情報を手にすることができ、そこから何をピックアップして、どういう知的生産をすればいいかということをや大学の先輩という

か、プロフェッショナルな人に直接教わっていく。こういうかたちの教育になっていくんじゃないかと思えます。

広瀬 それではもう一問、橋爪先生です。IT革命によって可能になると言われている日本の労働市場の多様化、たとえば女性の労働とか新しいベンチャービジネス、そういったものについてはいかがお考えでしょうか、ということですか。

橋爪 企業は何をするかという点、モノのレベルと情報のレベルと、二つの活動をしてます。大部分の企業はやはり製造業、モノを造ります。流通業もモノに関係があります。モノを動かさなければならぬ。この部分は企業が実際にやらなければいけないわけです。しかし情報についてはどうでしょうか。情報、ネットワークと通信のメカニズムさえあれば、どこで誰がいつやってもよいわけです。そこで情報処理に関しては、たとえば九時〜五時の間出社して、本社でやるというかたちが不合理なら、アウトソーシングしてやればいいと思えます。

最近、バックビジネス機能というのですか、フィリピンとか香港とかシンガポールとかインドとか、そういう国が英語に関するいろいろなビジネスをアメリカなどから請け負っています。たとえばアメリカのフリーダイヤルは1-800-というふうには始まるんですが、

そうダイヤルするとインドかなんかにかかる。二十四時間サービスをやっているわけですね。彼らは英語を流暢に話しますので、アメリカの人はインドにかけてるとは全然思わないけれども、実は安い賃金でそういうサービスをしている。それは社外サービスの一部ですけども、そういうふうな会社外に振り分けることができる情報関係のビジネスやジョブは、たくさんあるわけです。大量に受注すれば質

日本の地盤沈下を防ぐには

広瀬 橋爪さんご自身が創造し発信しているという展望、実践にはどのようなものがありますか、という質問ですけれども、いかがですか。

橋爪 日本語ではある程度発信しているんですが、おそらく質問は、ITの時代に世界に通用するような情報をどうやって発信していくかだと思います。これは、私が英語の本を書いたり英語で演説したりすれば、いちばん簡単ですけども、それは個人的には非常にコストがかかることで、今すぐやれと言われてもなかなか難しい。

先ほど話しましたが、情報発信というと、日本人はとかく個人プレーである。パーソナルメディアで考えるが、そうではなくてシステムなんです。日本全体で、たとえば日本国内の論文をどうやって英語に訳して定期的に

が高く安価になるわけですから、今後そういうかたちでどんどん、外に出ていくんじゃないでしょうか。

また外に出ていくということは、それだけの新たなビジネスチャンスが、家庭なり地域にいるまま手に入るという、そういうふうなかたちになると思います。正社員と、契約社員の垣根が低くなっていくというふうに予想されます。

発信するのかと考えるべきです。企業の内部の情報、法律、制度、教育、さまざまなところの情報に優先順位をつけて、予算の許す限り、そして必要である限り、それを英語に直していく。ビジネスというよりも、ある程度公共性があるので、税金を使ってやってもいいと思います。そういうことをどしどしやら

Webは、おぼろげなネット

川浦 難しい質問ですね。要するに信頼できるかどうかという問題にも置き換えるならば、信頼できる手掛かりをインターネット上に求めるのか、それともインターネット外に求めるのかというところで一つぐらいヒントがあるかなと思います。信頼できるところが

ないと、日本自身が地盤沈下していくのではないかと。こういうことにもっとおカネを使うべきだと思います。

広瀬 それに関連してですが、IT関連で六千億円という予算を計上していますが、それでよいのでしょうか、IT予算が、光ファイバーケーブルを全国に配るといふ、そういうふうなことに偏っているけれども、という質問ですが。

橋爪 私もまったく、その偏り方については、とんでもないと思っています。ITの本質を考えると、ケーブルのようなモノでなく、どういう情報をどういう順番で発信するかというところに、もっとおカネをかけた方がいいと思います。

広瀬 では川浦先生への質問です。Web上の情報の質を見極める目はどのように養えばよいのでしょうか、ということですけども、いかがでしょうか。

出している情報かどうか。それはネットワーク外の手掛かりの例です、ネットワーク内の手掛かりの例としては、その人ないしその企業が、ホームページで今までどんなことを言ってきたのかという、蓄積や流れの中で見ていく。単純に言えば、今まできちんとした

ことを言ってきたから信頼できるだろう。そういう二つがあると思います。実際、アレクサンダーたちは『ウェブ・ウィズダム』という本の中で、権威、正確さなどの評価基準を提案しています。

もう一つ違った側面で言えば自分でホームページをつくってみる。テレビやラジオだとそれなりのコストと、大きな装置がいりませんが、ホームページに関してはいえば技術はたいして必要ないし、コストも同様。ですからインターネットに関して不満があるならば、文句があるならば、ホームページをつくってみたらと勧めています。つくればどうい

一人が複数の役割を演じる

川浦 いろいろな要素を含んでいる質問ですが、まずお父さんが、家族に対して「家族サービス」と言っている間は難しいですね。要するに家族を構成している当のメンバーが自分の所属しているグループのメンバーに対してサービスするという発想自体に違和感を覚えます。

場合に依りて演技、あるいは顔を使い分けているという話ですが、二十四時間の中で「オン」の時間のうち仕事の占める割合はかなり大きい。ですからいくらプライベートな時間を意識してつくっているという人がいたとしても、仕事のほうにかなりの時間を割かれて

う情報が信頼できるものかという見る目

も同時に養われることがあると思います。受け身だけではやはり難しいなあという感じがします。

広瀬 それからもう一つ、バーチャルの世界の中での匿名性の必要について。サラリーマンはその任務によっていろいろなところで演技している。家庭に帰ればお父さん、上司の前では違う人間、Eメールの上ではまた別の人間になっている。そういう新しい人間像をまたネット上でつくる可能性について、伺っていますか、いかがでしょうか。

いるのであれば、結局そちらがその人の意識の中で占めるウェイトも大きくなるわけです。たとえ使い分けていたとしても一人として自分という部分は相対的に低くなるざるを得ないし、自分自身を規定するときにもたぶん職業人としての自分がかかなり前面に出てくるのではないのでしょうか。

NGO、力のないものが大きな力を持つ

広瀬 それからこれは三人に向けての質問というところでお答えしたいと思います。NGO

ちょっと違う話なのですが、夫婦のコミュニケーションを調査したことがあります。そのとき夫婦の会話時間をたずねました。すると、夫婦の会話時間がほとんどゼロという人が少なくないのです。もし顔を使っているというのであれば、こんな結果にはならないはずなんです。家に帰って「夫」として振る舞うのであればもっと会話をしてほしい。会話の中身は極端に言えばどうでもいい。そこま

でいっていないのです、現状では。会話があるかないかが非常に重要な意味を持っている。会話がゼロに近い夫婦は、妻の疎外感が強い。夫のほうは無頓着とか鈍感で分かっていない。ですから定年後、別れ話を持ち出されて困惑するのは男の側であって、女性のほうはそれなりに必然性があるわけです。ですからもし使い分けているのであれば、家でその役割も全うしてほしい、そう思います。

広瀬 ということはかなり役割を演じることが肯定的に捉えてもよいということでしょうか。

川浦 ゴフマンという有名な社会学者も言っていますか、みんながそれぞれ「プレーヤー」、一役者なのです。

とITについて。NGOにとってITはどのような武器になるか、という質問です。これ

は私から答えさせていただきます。

マレーシアで今から二年ぐらい前にアンワ
ー大蔵大臣がセックスキャンダルで逮捕さ
れ、牢獄に入れられたというとんでもない話
がありました。そのときにマレーシアのいわ
ゆる大新聞やテレビなどのマスメディアは政
府の権力の配下になりましたから、アンワー
さんに対する援護記事はまったく掲載されな
かった。

ところがその年にマレーシアのインターネ
ットの普及率がぐんと上がるんです。コン
ピュータの保有数も劇的に増加しました。そ
してアンワー支援に関するネットが立ち上が

送り手と受け手の境がなくなる

橋爪 既存のメディアは、情報の送り手と受
け手がある。これは、コミュニケーションの
基本ですね。その送り手から受け手に伝わる
メッセージの伝え方が大量である。これが、
マスメディアだと思うんです。ラジオにして
もテレビにしても、今までのマスメディアと
呼ばれるものは、技術的な制約によって、送
り手優位、そして聞き手は受け取るだけ、こ
ういうかたちのものであった。ヒトラー
を例に出すまでもなく、このメディアを十分
に活用して、その根元を握ってしまえば、そ
れが大きな権力になったわけです。またそれ
が国単位になっているという点があったわけ

りまして、あつという間に全国を駆け抜けた。
もちろんコンピュータがないところではコン
ピュータから打ち出したものをコピーして、
島から島へ配って、大きな改革のうねりが起
きました。
これは一つの例ですけれども、ITは巨大
なメディア、新聞など権力者のメディアに立
ち向かうには強力な武器となる。NGO、
それから政府の承認しない組織、そういった
ものが大きな力を持つていくには、このイン
ターネットというのはすごい威力があると思
います。そのへんは橋爪先生、いかがでしょ
うか。

です。

それで、ITの特徴は、送り手と受け手と
いうところが曖昧なわけで、受け手は実は、
積極的にネット上を探索して必要な情報を探
していくという、そういう役割をしなければ
ならない。ホームページを出す場合も、送っ
ているわけですけれども、誰にどういうふう
に送っているかというのはいへん曖昧なと
ころがあつて、受け手の側がそこまで取りに
きてくれないと送れないわけですね。とい
うわけで、送り手と受け手という図式が崩れ
ている。マスメディアであるとは言えないが、
しかし情報をマスに送る手段ではありません。

もう一つの特徴は、地球規模のネットワー
クなので、国境がここには介在しにくい。で
すから権力にとってみれば、インターネット
はたいへんに禦しくい、もう一つの情報の
回路であるということになります。

そこでNGOですけれども、これはガバメ
ント(G)でないという点に特徴があるわけ
です。ガバメントは、ある地域的な範囲に住
んでいる人たちから税金をとって、無理矢理
そこで何かの権力を発揮している。それは必
要があつてやっているんですけれども、すべ
ての問題がそこで解決できるか。解決できな
いならば、政府に代わる組織、つまりNGO
が何か出番がある。NGOは、地域的な制約
にとられないつながりを安価に、コミュニ
ケーションの手段として持っているなければな
らないわけで、それはけつしてマスメディア
ではあり得ません。そこでいわゆるIT技術
が本質的に効いてくる。こういうふうに思
います。実際に多くのNGOはそうやって活動
しているのではないのでしょうか。

川浦 直接NGOにかかわる話ではありません
んが、今、各地でエコマネーという地域通貨
の試みが具体化しています。今までの経済ベ
ースに乗りにくかったもの、たとえばある種
の知識とか特技を、その地域内で流通するよ
うにする仕組みです。

そのときにたとえばネットワークを使って、
私はこんな情報を持っていますとか、こんな
ことであれば教えられますといったことがら

を地域内で流す必要があります。

それと、今までの枠組みにとられないで、
自分たちの自発性をうまくかたちにしてい
く仕組みが今の質問の主旨だとするならば、や
つてみたいという気持ち、あるいは今までの
枠組みではうまくできなかったことを実現し

ITは進行中の技術 皆が模索している

広瀬 それからもう一つ、これも三人に対す
る質問なんですけれども、「IT時代の行方と
ネットワーク社会」というタイトルで、本日
これだけの聴衆が集まってくれました。その
方たちは何を期待して集まったと思っていま
すか、という(笑)。これはきつい質問なんで
はないかと思えますけれども、では私からお
答えいたします。私は本日の聴衆はそんなに
ITに本当にお詳しい方ではないんじゃないか
かというふうに思います。ITという言葉に
対してどこかちょっと知っておかないといけ
ないな、乗り遅れちゃいけないなということ
がある程度おありになる方たちではないか
なということが一点と、あとは今日の講師の
方々が論客として素晴らしいので、ぜひお話
を伺いたいと思つて来てくださった方もいら
っしゃるんじゃないかと思えます。本当にIT
にお詳しい方はもっと専門的なシンポジウ
ムに行かれるのではないかなつていう気がし
ております。いかがでしょうか、橋爪先生。

たいというとき、そういう意思を持つ人たち
にとつて非常に有力な追い風、言わば電子の
追い風になる。だから今以上ということか、意
思を明確にして、そのためにどういうふう
に役立てるかと考えていけば、いろんな用途が
出てきます。

橋爪 そうですね。似たようなことなんです
けれど、少し言い方を換えますと、ITの専
門的なシンポジウムってたくさんあると思
うんですが、逆に制約があるような気がしま
す。現在こういう技術的な条件が整つてきたので、
次のITで売れそうな商品はこうだとか、技
術的に今のシステムにはこういう問題がある。
そういうことを議論すると、なんかITの話
として通用してしまふ。

ただこれは進行中の技術なので、現在こう
いうことが技術的に可能だとか、五年後にこ
うなるであろうということがITの全体なん
だろうかという、私はそうではないんじゃない
かと思えます。そうすると、変にスペシ

議論をするよりどうするかを学ぶ

広瀬 それではまた質問に移らせていただき
ます。これは私への質問です。英国の教育に

ヤリストになつてしまふよりも、ある程度遠
くから見ると二十年、三十年、五十年の流れを
見ていくという、そういうやり方もあつてい
いのではないか。

それは必ずしもスペシャリストがいれば
よくできる仕事ではないのかもしれない。そ
うだと私の出番もあるわけですけども、そん
なふうに私は理解しています。

広瀬 もの言い方によつてこんなに変わる
もんなんですよかと思うほど、たいへん勉
強になりました(笑)。いかがでしょうか。

川浦 私はまず第一に広瀬ファン、橋爪ファ
ンが来てるんじゃないかなと見えています。
どんなことを書いているか、話しているか
というの、それこそインターネットでもマ
スメディアでも知ることができるところで、ど
んな人がそういうことを言っているのかとい
うリアリティを求めてきているんじゃないの
かなと思えます。

橋爪さんがおっしゃったこととつながりま
すけれども、ITの技術自体は日進月歩です。
で、そういうことに振り回されない部分で、
根本を押さえておきたいという人たちが来
ているのかなという印象を持っています。

比べ、日本の教育がいい点は何でしょうか、
という質問です。

私は英国の教育の専門家ではありませんし、ただか二年ぐらい向こうの大学院で生活をしたということですので、大きなことは言えません。けれども、ただ一点違うとすれば、英国では議論をする、間違ってたってかまわない。中学生の子どもが正しい知識を必ずしも持っているわけではないのです。でも議論をすることを積極的に周りの人たちが奨励する。そこでぶつかって言葉でやりとりすることが、個人の人格を誹謗することでは必ずしもないんだということを、小さい頃から訓練する。そういう点はイギリスはたいへんすぐれていると思います。

日本の教育を考えると、まあずいぶんのんびりしているなあと思います。もちろん今いじめとかいろいろ問題はありますから、そんな簡単には言えないけれども。イギリスの一般的な大学でいえば、本当に学期の間中は人間洗濯機に入れられたようです。たくさん本を読み、たくさんレポートを書かなくてはなりません。一週間に一日ゆっくりお風呂に入りたいたいというのが、ほんとに勉強している人たちの願いのようなところがあります。

それでは私に対しての質問に移ります。男子学生のコミュニケーションについて、です。私がさっき言ったことにとってもカチーンときた方がいらつしやるみたいで(笑)、おおいぞ、いいぞ、このカチーンがほしいんですよ。とくに男子学生がなんかカチーンとして生意気そうな顔で教室にいますと、私はとっ



てもほっとします。先生の言うことをぼーっとして聞いて拍手なんかしていると、きつと何にも分からないだろうなと思ってしまう。こうやってカチーンとした反応はうれしい限りです。これはご本人が現在学生ですので、私の発言に多少苛立ちを覚えました、ということですね。

大学生のコミュニケーションのなさというのは、日本の大学のシステムに問題があるのではないのでしょうか。リアルなコミュニケーションの必要性も踏まえて、文部省の方ということで(笑)ご意見を伺いたい、ということですね。

私は、文部省からお給料をもらっていますが、文部省を代表した意見は言えません(笑)。たしかに今言ったように議論をするということ、中学生、高校生、小学生からしていくということがとても大切なんじゃないでしょうか。先ほど橋爪先生は実際に殴られたり殴ったり、そういった肉体的な経験を大切にするといったこともそうですけども、それと同時に言語的な体験ですね。人を傷つけないでどうやってやり込めるか、どこまで言うかと相手は泣いてしまうか。どこまで言われると恨みを持つか。それも実際は肉体的な体験の一部なのではないかというふうに思います。でもこういった質問は多少苛立ちがありましたというご質問をいただいた方に感謝申し上げます。どうぞどうぞ苛立って、コミュニケーションに対する自分の考えをさらに練り上げて

いただきたいというふうに思います。

それでは三人に対する質問に移りますけれども、ITによってアクセスできるかできないか、いわゆるデバインドの問題についてのどのようになっていますか、という質問がいろいろな方から寄せられました。ITのエリート教育をして、できる人できない人の格差を明確にして、かえってできない人たちに焦らせるような方針をとったらどうかなんていうご意見も寄せられていますけれども、そのへんはいかがでしょうか。

橋爪 いろんな問題があると思いますが、一つは象徴的にいえば、キーボードという問題があると思います。

今はコンピュータに触れるのに、キーボードを介さなければいけないわけですが、欧米世界では、最初に機械式のタイプライターが普及しました。これは二〇世紀の初めだと思わんですが、だいたいあちこちの職場や家庭、学校にも取り入れられた。それからしばらくしてコンピュータというのが入ってきましたから、キーボードにそんなに違和感がないんです。

日本の場合には、キーボードはそれまでほぼ日常生活の中では触れる機会がなくて、コンピュータと同時にやってきたわけですね。しかしキーボードはある程度習練しないと使えない。そこでそのキーボードが、やはり敷居になってしまっている。キーボードの敷居のせいで、一千万人、二千万人ぐらいた

るまでは普及するけれども、そこから先が難しい。これを五千万人、六千万人、一億人にする。携帯電話は五千万人、六千万人に普及しましたけれども、それはキーボードがないからです。

わが国もキーボードの障害をなくしていく、音声入力とか、もうちょっと簡単な操作にするとか、なにかそういうことを考えなければならぬ。老人とか子どもとか、それによってコンピュータで世界が広がるはずの人たちのところにまだ届いていけない。そういう気がします。

その敷居を低くするための努力を十分して

やるやらないは個人の選択

川浦 たしかにネットワークにアクセスできる人とできない人とか、コンピュータを使える人と使えない人というところで、社会的な格差が生じているというように言われるわけです。使える、使えないという点では、それによつて何ができるかできないかが決まります

ので、一見格差がありそうな気がします。ですが、ほかの領域でも格差はあると思うんですね。新聞の記事が理解できる人とできない人、そういうものまで含めると、さまざまないところ、格差はすでにある。デジタルデバイスだけを取り上げるのではなくて、どうせ情報格差を取り上げるのであれば、私はさまざま

いくことは、今後必要ですね。

広瀬 それにちよつと私が付け加えさせていただきますと、先ほどビデオで見ていただいた障害者の方たち、彼らを助けていくためには文字から音声、音声から文字へ、そここのころの変換がもつともつと自由に瞬間的にできるようにになると、ずいぶん情報は変わってくるというふうに思います。今後その方向はかなり進んでいくのではないかと期待しているところです。

今のデジタルデバイスの問題でいかがでしょうか。

まなところでの格差を論じるべきだというふうに思います。

そういうふうに考えるとあるところではエリートと、そうでない人に分かれるかもしれないし、あるところでは男と女で分かれるかもしれない。いろいろな分かれ方をして、単一のデバイスが存在しない。単純に全体が二分される、あるいは三分されるような状況というのはい出てこない。そう考えれば、なにかしら芽が見えてくるのではないかなあというふうに思います。

インターネットに代表されるデジタルデバイスに限定して話をするならば、私は全員や

する必要はないと思います。現状ではやりたい人がやればいい。やりたいけれどもできない人たちはサポートするのは必要なことですが、やりたくない、あるいはやらないということも非常に主体的な選択だし、それが許される

覚悟を決めているイギリス

オープンユニバーシティ

広瀬 今の問題でちょっと私も付け加えてみますと、先ほどお話しした英国のオープンユニバーシティは一九九七年から二〇〇三年まで、だいたい五年間の間にすべてのコースを何らかのかたちでIT化しようという計画を立てました。IT戦略というたいへん厚みのある戦略レポートを出し、毎年どのぐらいのIT化を進めていけばいいのかわかることを計算し、実際にやるところです。もちろんこの大学もコンピュータに触れられないような人たちもたくさんいるわけです。とくにオープンユニバーシティの場合は高等教育の機会をなくした、たとえば第二次世界大戦で教育の機会に恵まれなかった方たちも学生としてたくさんいらっしゃいます。高齢者もいる。その人たちのためにはコンピュータを利用しない教材や、学校とのやりとりの方法もあります。でもすごいなあと思ったのは、大学は覚悟を決めていざれOUの運営や教育は

ような社会であるべきだと思っています。デジタルデバインドをどう解決するかということと同時に、デジタルデバインドで不利益を被る人がいることを前提に社会自体もつくっていく必要があるのではないのでしょうか。

一〇〇パーセントIT化することです。そのためには高齢者や障害者向けにITの講習会を各地の学習センターで開いたり、そういったWebページをつくって、どうやって勉強していったらいいかというのを確実に教え込もうとしている。やはりもうITなくしては今後の学習社会にアクセスするというのは難しいと、心に決めてるところが生半可な決意ではないと思います。(図4、5) それでは残り時間がほんの僅かになりました。IT、ITといつて難しい、難しいというけれども、実はこれからどんどん簡単になっていくと思います。テレビのチャンネルをひねるとインターネットサーフィンするのとそんなに変わらない時代がやってきて、どんどん誰でもできるという感じで機械は簡単になっていく。そうするとやはりいちばんの障壁は橋爪先生がいちばん最初におっしゃった英語だと思います。英語ができるかでき

いか、これが世界のWebページに発信し、情報を取ってくるができるかということになると思います。

この夏の私の体験ですけれども、トルコ人の小学校五年生の十歳の男の子がカリフォルニアの夏の英語合宿に来ました。その子は公立学校に行っているけれども週の十五時間英語のクラスがあるというんです。「すごいね」って聞いてみたら、理科と算数と化学は全部英語でやるんだって言うのです。それいつ頃から始まったのって訊いたら、ここ最近のことだと言いました。今の日本の小学生に外人の先生を連れてきて週一時間か二時間、「ハロー」なんてやるものとは全然違う。トルコという国のその試みに私はびっくりした次第ですけれども、日本人が英語ができないということでは実は私も職が守られてるという感じがあります。世界中には素晴らしい大学を出たオーバードクターの方たちがたくさんいます。その人たちがもし日本で私と同じ職を争ったら、私はすぐに負けてしまうだろうと思います。でも日本語があるから私は辛うじて大学で教えることができるんだなと思うことがよくあります。そのへんは橋爪先生いかがでしょうか。

橋爪 今のトルコのやり方は、ほかの国でもやっています。たしか、イマージョン教育というのです。小学校とか中学校とかで外国語以外の教科も外国語で教えることにすると、外国語が身につくのみならず、母国語の能力

も伸びてたいへんに刺激になるという新しい教育方法です。

これはいい方法だと思うんですけど、問題はそれだけの教員がいるかどうかですね。従来のように教室で教えるようだと、外国語でそれぞれの教科を教える教員がいなくてはならないので、公立ではなかなか難しいのではないのでしょうか。いわゆるインターナショナルスクール的な経営になるわけなんです。ですからこれは効果があるということには私も認めますけれども、しかし絶対の決め手にならない。コストがかかりすぎるということがあります。

ではそれに代わるうまい方法はないかと考えていくと、まだ決め手がない状態だと思います。しかし日本の従来のやり方のように、英語の時間に英語を教えればいいのかという考え方は、もう全然たしかないところになってきます。もしITなどを使って、NOVAのお茶の間留学みたいな、何かの方法を開発できるんならば、私は期待したいと思っています。

海外の大学の動き
▶ 開かれてゆく大学
▶ 生涯教育・継続教育
▶ パーチャルユニバーシティ
▶ 需要の増大を低いコストで

図-4

知識経済市場の発展
▶ 英国の事例
▶ 英語
▶ 質の高い英国高等教育
▶ 英国の世界ネットワーク(旧植民地)
▶ 世界制覇をねらう公開大学
▶ BBCの蓄積と技術

図-5

言葉により思考、価値観はどう変わるか

川浦 北欧はインターネット先進国で知られていますが、どの国でもある一定年齢に達すると英語を授業で受けます。ですから公用語とは言わないまでも、英語は使えるようになる。言葉とものの考え方、思考、価値観は密接に関わり合っていますので、英語をある程度身につけたときに、われわれの思考とか価値観はどう変わるのかなと思います。

語学は集中して身につけるべし

広瀬 よく私は言うのですけれども、ITを覚えるのはたぶん三日か、あるいはもうちょっと覚えたいなら三カ月もあればできるだろう。でも英語は私の経験から言って最低三年本気でやる。でないとなあWeb上のさまざまな情報を瞬時にかなり早く取捨選択し、ガセネタからいいネタまで分け入って探して

単に英語が使えるということだけでは済まないことも出てきますし、アイデンティティの問題にもつながってきますので、非常に難しい。かと言ってこういう状況、あるいは時代ですので、日本が孤立しないためには英語も使えるようにならないといけない。そのあたり、私自身はまだちょっと迷っている状態です。

いくことは難しい。最低三年、できれば五年、それもかなり本気でやらなくてはならないというのが私の経験から思うことなんです。それを政府はどのぐらい本気でやっていくのかという、まあコストの問題もありますけれどもトルコではそれを公立学校でやってるんですよね。そのへんの踏ん切り方がかなり違うと思います。

それでは各先生に最後に一言。「ではこれから私たちどうしたらいいの？」今日ここにいらつしやる皆さんが世界の流れ、個人の情報の変化などのお話を聞いたあとで、「では、どうしたらいいんでしょう」と。先生方、一言ずつお願いいたします。

一人ひとりの理解と自発性が出発点

橋爪 従来新しい技術をわが国に導入するには、通産省とか大蔵省とかが計画を立てて、上から決まっていたケースが多かった。だけどもインターネットは、どうもそういうやり方では、いちばんうまくいかないものではないだろうか。

まず一人ひとりの個人ニーズがある。それから日本だけでは決められない国際的な動きがあつて、そして国民一人ひとりがこの問題について、ある程度理解をしてアクションをとっていく。その合計として日本全体で、ではどういう技術を取り入れようとか、どういう投資をしようとかいう話になっていくんです。ここがたいへんで、通産省とベンチャービジネスは水と油の関係にあり、日本では元気のいいベンチャービジネスがなかなか育たないと言われていましたね。官主導のシステムになじまないのです。

ですから一人ひとりの理解や自発性が、ある程度出発点になるかなと感じます。

広瀬 ありがとうございます。では川浦先生お願いいたします。

みずから選択し、意志をもつこと

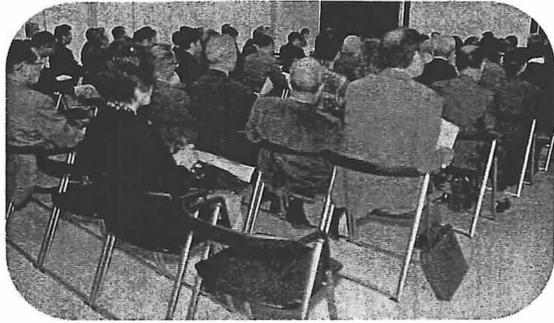
川浦 今日、私がお話ししたかったことは、みずから選択することの重要性です。先ほど携帯電話を例にお話ししました。ここではワープロを例に考えると、ワープロはたしかに便利ですが、たとえばワープロがなくて文章は書けるかということ、もうその状態には戻れない。つまりいろいろなパーツとか部分を出していつてあとで組み合わせれば文章になる、それがワープロの機能なわけです。ワープロが出る以前は自分の頭の中でストーリーをつくり、話の筋道をつくって文章にしていったわけです。そういう能力が何となくいつの間にか弱まってしまつて、もうワープロがないと短い文章でさえ書けなくなつてきている。そういう現状が一方であり、ある部分が確実にアウトソーシングしてしまつていて、その代わりに何らかの見返りはある。三日かかっていた文章が一日で書けるとか。しかし、それが日常になつてしまつて、再び締め切りぎりぎりまで仕事しなかつたりするわけです。自分にとつて何が大事なのかあるいは今自分の能力はどんなふうになつていのかということを見つめながら、意識しながらやつていけばいいのではないかと思ひます。

二十一世紀をいかに自覚的に生きるか

広瀬 ありがとうございます。そうそう時間になりました。答えはけつして一つではありませんが、今日のお話をまとめてみますと、二十一世紀はかなり自覚的に自分で選択し、強い意思をもつて自分たちの目指す社会を選びとつていかななくてはならない。そういったことが個人のレベルでも、また社会的なレベルでも求められているのではないか。そしてそのときに情報というものが個人の考え方のやりとりのレベルから、また国やNGO等、いろいろな考え方や、多様な活動の情報公開することによって、その中からまた取捨選択していく。そういうことをわれわれに突きつける時代がやってくるという気がいたしました。

今日はこのへんで終わらせていただきます。参加の皆様、本日はどうも最後までお付き合いいただきありがとうございます(拍手)。

(二〇〇〇年十月三十一日)



出席者 プロフィール

広瀬 洋子

(ひろせ・ようこ /
メディア教育開発センター助教授)
慶応義塾大学文学部卒業。英国オックスフォード大学大学院社会人類学修士課程修了。
社会人類学・メディア教育、専攻。三菱化成生命科学研究所社会生命科学研究室特別研究員を経て現職。
日本民族学会、国際女性学会、Japan Anthropological Work Shop、生命倫理研究会(幹事)所属。メディアを利用した障害者の高等教育、IT教育と大学の行方、アジアの女性と情報技術、趣味：映画。
「アウンサン・スーチーの自由を求める国際女性ネットワーク」を結成、呼び掛け人。
(主著)『子供観』『障害者と高等教育』『共生の時代を生きる』
(訳書)『母性をつくりなおす』(バーバラ・K. ロスマン)
現在、放送大学のテレビ授業『共生の時代を生きる』の第6回の講師を務めている。

川浦 康至

(かわうら・やすゆき /
横浜市立大学国際文化学部教授)
東京学芸大学教育学部学校教育学卒業、東京都立大学人文科学研究科博士課程修了。
社会心理学・情報行動論・コミュニケーション論、専攻。
電気通信総合研究所を経て現職。
(主要共著書)『インターネット社会』『メディアサイコロジ』『電子コミュニティの生活学』
<http://revir.cc.yokohama-cu.ac.jp/>

橋爪大三郎

(はしづめ・だいさぶろう /
東京工業大学大学院教授)
東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。東京工業大学助教授を経て、同大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授。理論社会学専攻。
(著書)『橋爪大三郎コレクション』(全三巻)『性愛論』『はじめての構造主義』『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『冒険としての社会科学』『民主主義は最高の政治制度である』『橋爪大三郎の社会学講義』『言語派社会学の原理』『こんな困った北朝鮮』ほか。
(共著)『自分を活かす思想/社会を生かす思想』『小室直樹の学問と思想』『電脳福祉論』『僕の憲法草案』『選択・責任・連帯の教育改革』
<http://www2.valdes.titech.ac.jp/~hashizm/>

著者略歴

野口正一(のぐち・しょういち)
東北大学工学部電気工学科卒、東北大学大学院工学研究科電気・通信工学専攻、博士課程修了。工学博士。
東北大学助手、電気通信研究所助教授を経て、東北大学教授に就任。大型計算機センター長を経て、応用情報学研究所長。退官後、日本大学工学部情報工学科教授。情報処理学会会長を経て、会津大学学長に就任。
この間、オーストラリアAISA研究所、米国スタンフォード大学客員教授。
情報工学専攻。情報工学基礎論、情報システム構成論、コンピュータネットワーク、人工知能(非アルゴリズム)をテーマとしている。
電子情報通信学会、情報処理学会、人工知能学会に所属。
著書『情報工学基礎論』、共著『情報理論』『知識工学基礎論』『情報ネットワークの理論』など。
稲田記念学術奨励金、情報処理学会創立二十五周年記念論文賞、日本科学技術情報センター丹羽賞(功労賞)、電子情報通信学会功績賞、河北文化賞、科学技術庁長官賞、科学技術功労者表彰、郵政大臣賞等を受賞。